小谷部全助 森川真三郎 両畏兄の追想

宮城　恭一

「不精せずにもっと遠くの雪をとって来い」と言われ、吹雪の吹き荒れるテントを出た。息が出来ない程だ。

時は昭和十二年三月中旬、場所は遠見尾根の稜線上。厳冬の北岳バットレスの登攀に成功し、その後直ちに目指した鹿島槍荒沢（カクネ里）の北壁の積雪期登攀の、両氏のサポートとして入山したときのことである。私は予科一年の三月、すぐ二年生になるところ。一緒にサポートしたのは、小林重吉さんと鷲崎雄四郎　　である。

遠見尾根は大糸線神城駅で下車して直ちに山道に入る。長いアプローチはない。深い雪の急登が続くので直ちに輪カンを着ける。二週間分の装備であるからかなりの荷を背負った。石油の一斗罐もある。小屋は利用しないという計画で、最近山岳部で購入した自慢のウインパーテントを張った。テントを張る前に、雪上に出ている樹の小枝を折り取って来て敷きつめる。その上にテントを張って、木綿の内張りをつけると快適な空間が出来る。夕食後お茶を飲むのに水の補給が必要となり、私がテントの出口の近くの雪を鍋に山盛りにしてラジュウスにかけた。ところが出来た水は煙草の吸いがらが一杯浮いていて、茶色の湯ができた。それで冒頭の言葉になったのである。

そのとき小谷部、森川両先輩の厳しいがやさしさのこもったまなざしは、今でも目に焼きついている。

両氏はその後、前穂高の東面、奥又白の壁の登攀を果たされたが、凍傷を負われ、両足の指を無くされた。このことは針葉樹第十号に詳しく記されている。両先輩は学生時代の青春をひたむきに、当時の大学山岳部のあり方に向って邁進したと言って過言ではあるまい。

そして両氏は奇しくも終戦の年、昭和二十年の十二月十三日の同日に、同じ胸の病いで逝去されている。その当時私は学徒動員で近歩四連隊に所属し、スマトラで終戦を迎え、知るすべもなかった。どうしてこうも同時に亡くなられたのか。

両先輩の偉業は、日本山岳会も日本の山岳史に留められ、高い評価を与えられている。

しかし一方そのいき方についての批判もあり、今の一橋山岳部の抱える問題も同一であろう。私も色々考えているがなかなか結論が出せない。

しかし、親しく接し、数々の山行を共にして、色々と教導してくれた両先輩は、私の胸に今でも偉大な存在であることは間違いない。

余談になるが予科一年の夏の合宿は穂高の涸沢で行われ、その時徳本峠を超えて上高地に入った。その時私の登る姿を見て「ゴムちゃん」という、あまりかんばしくない仇名をつけてくれたのは小谷部さんである。小谷部先輩は「助さん」と呼ばれていたが、森川先輩には仇名はなかったようだ。